

「憐れみの器」

聖書の物語は、全てがいつも幸せなものだけではありません。例えば、旧約聖書にアブラハムという人物が出てきます。彼は神から「あなたには星の数ほどの子孫が与えられる」と約束されているが、なかなか子どもができないことに悩んでいました(「主は彼を外に連れ出して言われた。……『あなたの子孫はこのようになる。』」創世記 15:5)。それゆえ、彼の妻サラは奴隷のハガルに子どもを産ませるようにとアブラハムに願い、その願いは叶えられました(「ハガルはアブラムとの間に男の子を産んだ。アブラムは、…男の子をイシュマエルと名付けた。」創世記 16:15)。しかし、いざ子どもが生まれてみるとサラは二人を疎ましく思うようになり、辛く当たり、遠ざけようとします。間に挟まれたアブラハムは悩みます。

そんな彼に神は、「あの子供とあの女のことで苦しまなくてもよい。……彼もあなたの子であるからだ」(創世記 21:12-13)と語りかけ、二人が神によって助けられることを指し示します。仮に涙する者があっても、神の助けは造られた全てに及ぶ、と。神の思いは神が創造された世界全てに満ちていて、神を賛美するために人はいるのですから(「後の世代のために／このことは書き記されねばならない。『主を賛美するために民は創造された。』」詩編 102:19)。

ところが、人間はいつしか自分たちに都合良く物語を捉えるようになります。「神に選ばれたアブラハムとその子孫だけが神の救いの物語の主人公なのだ」とうそぶくようになります。「天の国に入ることができるのはイスラエルの民だけだ」と公言するほどでした。そして、分断と差別が生まれます。差別している側は自分たちの差別心に気づくことはありません。足を踏みつけていることにも気づきません。そして、もし痛みを訴えれば、それをきっかけとしてさらなる差別を生み出していくのです。

イエスはそんな彼らに「いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く」(マタイによる福音書 8:11)と語りかけ、神の思いに気づかせようとします。神が望んでおられるのは分断でも差別でもありません。独り子イエス・キリストをお与えになるほどに愛しておられるこの世界に生きる全てが、真の平和を実現することを望んでおられるのです。

イエスの弟子たちはこの思いを受け継いだはずでした。けれども、やはりと言うべきでしょうか、イエスを救い主として受け入れた人たちの中にも、未だ「救いはイスラエルの民だけだ」と考える人たちが存在しました。そのような彼らにパウロは「人よ、神に口答えるとは、あなたは何かか」(ローマの信徒への手紙 9:20)と強い口調で語りかけます。

差別と分断を取り除くために来られたイエスを信じていながら、なぜあなたたちはなおもそれを維持しようとするのかと責めます。その上で、「怒りの器として滅びることになっていた者たちを寛大な心で耐え忍ばれたとすれば」(ローマの信徒への手紙 9:22)と、「あなたたちが滅びるべき存在だと思い込んでいる人々をも神は受け入れておられる」ことを示します。そして、「憐れみの器として栄光を与えようと準備しておられた者たちに、御自分の豊かな栄光をお示しになるためであったとすれば」(ローマの信徒への手紙 9:22)と、「なおも神の思いから離れているあなたたちをも神は救いへと導いてくださっているではないか」と、彼ら自身が気づくように語りかけるのです。

「神はわたしたちを憐れみの器として、ユダヤ人からだけでなく、異邦人の中からも召し出してくださいました」(ローマの信徒への手紙 9:24)。神は全ての者を愛しておられます。一人ひとりが神に愛されている「憐れみの器」なのです。

人間が勝手に神の思いを分断することなどできはしません。にもかかわらず、私たちの世界は今もなお分断と差別の中にあります。世界中を巻き込む戦争は 80 年間収まってはいるけれど、今もなお世界のあちらこちらで争いは続いています。もっと小さな争いは私たちの周囲でも何度も起こり続けています。

今こそ、私も神の憐れみを体現する一人なのだということを思い起こす時です。神と共に平和を実現する始まりの時としましょう。

